

コウノトリと六人の子どもたち

M・ディヤング作 遠藤寿子訳



930 コウノトリと六人の子どもたち

マインダート・ディヤング作

遠藤寿子訳

岩波書店 1967

356 p. 22 cm (岩波の愛蔵版 23)

小学5,6年以上

M. DeJong: The Wheel on The School, 1954.

岩波の愛蔵版 23

■コウノトリと六人の子どもたち 定価一三〇〇円

一九六七年十一月二十日 第一刷発行 ©

一九七五年八月二十日 第二刷発行

訳者 遠藤寿子

発行者 東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ五

岩波雄二郎

印刷者 長野市中御所二ノ三〇 田中忠

発行所 101 東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ五

株式会社岩波書店 〇三二六五十四二一

本文印刷 大日本法令印刷株式会社

製本 株式会社松岳社

表紙・箱・見返印刷 錦印刷株式会社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

コウノトリと

六人の子どもたち

マイムダート・デイヤング作

遠藤寿子訳

岩波書店



THE WHEEL ON THE SCHOOL

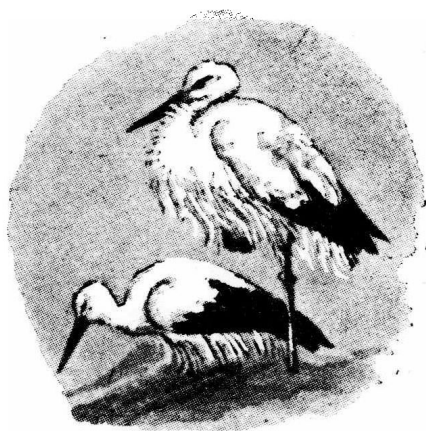
by Meindert DeJong

Illustrations by Maurice Sendak

1954

This book is published in Japan by arrangement
with Harper & Row, Publishers, Inc., New York
through John Weatherhill, Inc., Tokyo.

も
く
じ



1	みなさんはコウノトリのことを知っていますか……………	9
2	なぜだろうと、考えること……………	17
3	荷車 にぐるま の輪 わ ……………	39
4	イエラとお百姓 ひやくしやう さん……………	52
5	ピアとデイルクとサ克蘭ボの木……………	74
6	エールカと古い荷車 にぐるま の輪 わ ……………	99
7	アウカと錫屋 すずや さん……………	127
8	リーナと転覆 てんぷく している漁船 ぎよせん のこと……………	154
9	車 くるま の輪縁 わぶち ……………	192
10	海にはいっていく荷馬車 にばしや ……………	210

15 14 13 12 11

あらしとコウノトリ	228
学校の屋根に車の輪をあげる	247
浮き荷、流れ木	278
塔の中のおちびさんたち	295
海におりたコウノトリ	322
訳者のことば	351

さし絵 モーリス・センダック



コウノトリと
六人の子どもたち



この書を

わたしの姪のシャーリーとベヴァリーと
とぶように早い彼女たちの指に捧げる。

Ⅱ みなさんはコウノトリの ことを知っていますか



まず、お話を始めますと、シヨーラという村がありました。シヨーラはオランダの漁村^{ぎょそん}でした。フリースランド州^{しゅう}の北海^{ほっかい}の海岸^{かいがん}にあって、海の堤防^{ていぼう}にびったり沿^そっている村でした。だからシヨーラ^{しゅうら}と呼ばれていたのでしょう。村にいく軒^{けん}かの家と教会^{かい}が一つと鐘塔^{しょうとう}がありました。その家々の中の五軒^{けん}の家に、シヨーラの小学校へ通^{かよ}う六人の子どもがおりました。で、このことが、このお話にたいせつな役割^{やくわり}をするのです。ほかにまだ二三軒^{さんけん}の家はありましたが、そこには子どもがいまませんでした——年^{とし}よりばかりです。さよう、その人たちは年^{とし}よりばかりでしたから、このお話にたいして関係^{かんけい}はありません。ほかにも、まだ、子どもはいました。でも、小さい子どもたちや、うち歩きはじめたばかりの、まだ学校へゆかない子どもたちです——ですからその子どもたちも、このお話にはあまり関係^{かんけい}がありません。

シヨーラの六人の子どもたちは、みんな同じ^{おな}小学校へいっていました。

イエラという子がいました——六人のうちで、いちばん大きい子でした。年のわりには大柄で、がっしりしていました。エールカという子がいました。のろまで、ぶきつちよですが、頭はそうではありません。すばしっこい頭です。アウカという子もいました。このお話のはじまりのここでは、とくにアウカについていうことはありません。おとなしいごく平凡な子です、だれでもこの子といっしょに面白く遊べます。それからピアとデイルクもいます。ふたりは兄弟なのです。ほとんど、またいとこぐらいに、似て見えました。それどころか、ピアは、デイルクの好きなことが好きでしたし、デイルクは、ピアのやることを同じようにやりました。ふたりは、いっしょにいるのが好きでした。ふたごなのです。

それからリーナです。リーナは、ショーラの小さな学校で、たったひとりの女の子でした。女の子ひとりと、五人の男の子です。むろん、ひとりの先生がいます。男の先生です。

このお話をはじめのに、リーナのことを、いちばん先にいったほうが、よかったかも知れません。それは、この子が、ショーラの、たったひとりの女の生徒だから、というわけからではなくて、この子が、コウノトリについての綴方を書いたからです。ショーラには、コウノトリがいらないのです。リーナは、コウノトリについてのお話を、じぶんで、勝手に書いたのです——先生が、書くようにと、すすめたわけではありません。ほんとのところ、リーナが、五人の男の子たちと、そのひとりの先生を前にして、大声でその綴方を読みあげるまで、学校じゅうの、だれひとりも、コウノトリのことなんか、考えたことさえなかったのです。ところか、ある日、算数の時間のまっ最中に、リーナが手をあげてききました。



「先生、コウノトリについてのみじかいお話を、読みあげてもいい？ あたし、これ、みんなじぶんで書いたの。コウノトリのことについてなのよ。」

リーナは、それを、「お話」なんていいましたが、ほんとに、コウノトリについて、いろいろじぶんの考えをのべた文で、綴^{つづり}方^{かた}なのです。先生は、リーナが、じぶんからみじかい文を書いたことをよるこんで、算^{さん}数^{すう}の勉^{べん}強^{きやう}のほうは、そこでやめにして、リーナのお話を読ませました。リーナは、題^{だい}をいって、それから読みつづけました。

「みなさんは、コウノトリのこと、知っていますか？」

みなさんは、コウノトリのこと、知っていますか？

みなさんのお家の屋根^{やね}にくるコウノトリは、いろいろなしあわせをもってきます。あたしが、コウノトリについて知っていることは、つぎのこういことです。コウノ

トリは、大きくて、白くて、そして長い黄色いくちばしと、丈の高い黄色い足をもっています。コウノトリは、かさばった、ごちゃごちゃした巣を作ります。ときどき、みなさんのお家の屋根のうえに作ります。コウノトリが屋根に巣を作ると、その家に、幸運をもってくるし、それから、その家がある村にも、幸運をもってくるのです。コウノトリは鳴きません。コウノトリは、みなさんがたのしくって、気持ちのよい時に、手をたたくような、あんな音をたてます。きつと、たのしくって、満足した時、くちばしをパチパチさせて、そんな音をたてるのでしょ。コウノトリは、ほとんど、ねんがらねんじゅう口ばしをならしています。カエルや、小さい魚やなんかを、とろうとして、沼の中や溝の中にいる時はべつですけれど。沼や溝の中では静かです。けれども、屋根の上ではやかましいのです。でも、それはたのしいやかましさです。あたしは、たのしいやかましさは好きです。

あたしが、コウノトリについて知っていることは、これだけです。けれど、ネスの村にいる、あたしのおばさんは、コウノトリのことを、うんと知っています。毎年、二羽のコウノトリが、おばさんの家の屋根の上に、巣を作りにくるからです。でも、あたしは、コウノトリのことは、あんまり知りません。なぜならコウノトリは、けっして、シヨラへこないからです。そこらじゅうのほうぼうの村へはくるのに、シヨラへは、けっしてきません。コウノトリについて、あたしの知っているのは、これだけです。でも、もしシヨラへやってくれば、あたしは、コウノトリのことが、もっとたくさん、わかるのですけれど。

リーナがお話を読みおえてから、教室の中はしーんとしていました。先生は、じまんそうな、うれしそうな様子で、立っていました。そしていいました。

「すばらしいお話だったよ、リーナ。たいへんいい綴方だよ。そして、きみは、コウノトリのことを、なかなかたくさん知っているんだね。」先生の目は、うれしそうで、かがやいていました。先生は、大きなイエラのほうをむくと、「イエラ。」といいました。「きみ、コウノトリについて、どんなことを知っているかね。」

「コウノトリについてですか？」イエラはのろのろと答えました。「コウノトリのことについては……なんにも知らないや。」

イエラは、ぶあいそうな、むつつりした様子をしました。じぶんながら、頭がにぶいみたいに思えたのです。ここで一つ、説明しなければと考えました。「ねえ、」と、イエラは先生にいいました。「石なげで、ぼく打ち落とせないんです。なんどもなんどもやってみたけど、ぼくにはなんだかできないよ。」

先生はびっくりした顔をしました。「なんだってきみは、コウノトリを打ち落としたいんだ？」

「さあ、わかんない……」と、イエラはいいました。そして、じぶんの席で、体をすこし、もじもじ動かししました。イエラは、まの悪い顔をしていました。「なぜって、コウノトリは動くからでしょう。」

「なるほど。」と、先生はいつて、それから呼びかけました。「ピーア、ディルク、きみたちふたごは、コウノトリのことで、何を知っているかね？」

「コウノトリですか？」と、ピーアはききかえました。「なんにも知りません。」

「ディルク。」と、先生はいいました。

「ピーアとおんなじです。」と、ディルクは答えました。「なんにも知りません。」

「ピーアや、」と、先生はつづけました。「もしわたしが、さきにディルクにきいたとしたら、きみの答えはどういうのだね？」

「ディルクとおんなじです。」と、ピーアはすぐに答えました。「先生、ふたごの困ったことって、それなんです——もし何かを知らないとなると、二倍知らないことになるんです。」

先生も、教室じゅうのみんなも、その答えが気に入りました。みんな大笑いしました。

「さあ、こんどは、アウカだ。」と、先生はいいました。「きみ、どうだね。」

アウカは、たった今、ピーアのいったことで、まだクスクス笑いながら、いい気もちになっていましたが、この時、まじめになりました。

「ぼくの知っていることって、もしコウノトリが、リーナが話の中でいったように、たのしい音をたてるんだったら、そんならぼくも、コウノトリが好きだってことだけです。」

先生は見まわしました。「さあ、そのすみっこにいるエールカ、きみだけが残っているね。」

エールカは、ちょっと考えました。

「ぼくもやっぱり、リーナとおんなじです、先生。コウノトリのこと、よく知らないんです。だけど、もし、

コウノトリが、シヨラへくれば、ぼく、うんとわかるようになれると思います。」

「なるほど、その通りだね。」と、先生はいいました。「しかし、われわれみんなが、コウノトリのことをいろいろ考えてみることにしたら、どういうことになると思うかね。きょうの分の勉強^{べんきょう}は、もうおわるころだ。けれども、もしもだね、今からあすの朝、きみたちが学校へやってくるまでに、コウノトリのことを、考えて考えて、考えぬいてみたら、何かが起^おこりはじめると思うだろう？」

みんなおとなしく坐^{すわ}って、先生のいったことを、頭^{あたま}の中でくりかえして考えていました。エールカが手をあげました。

「だけど、ぼくは、コウノトリのこと、たいして知りもしないのに、うんと考えるってこと、できないと思うんです。あつという間にすんじやいます。」

みんなは、声をだして笑^{わら}いました。しかし先生の目は、よろこんでいるように見えませんでした。

「ほんとだ。その通りだ、きみのいう通りだよ、エールカ。わたしたちは、よく知らないのに、よく考えて見るっていうことは、できないね。だが、なぜだろう、なぜだろう、と考えることはできるじゃないか。今から、あすの朝、きみたちが、また学校へやってくる時まで、考えてみないかね？　なぜだろう、なぜだろう、と考えてみないかね？　なぜコウノトリは、このまわりの、どこの村にも巢^すを作っているように、シヨラへ巢^すを作りにつないのだろうって、考えてごらん。わたしたちが、なぜだろうと考えるはじめると、いろいろのことを、ほんとうに起^おこるようにさせることが、まま、できるものだよ。もしみんなが、やってみ

1 みなさんはコウノトリのことを知っていますか